

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 澤井 耐三

本論文は、御伽草子とも呼ばれる中世から近世初期にかけての短編物語である室町物語の作品について、その固有の論理とともに作品の背後に存在する世界を明らかにしたものである。本論文は、「はじめに」・序章の後、第一章から第四章まで十一編の室町物語についての論考を収め、付編と翻刻それぞれ二編を付す。

「はじめに」で本論文全体の視点と構成を示し、序章で「富」という観点から室町物語の作品群を意味づけたのち、第一章は庶民的な視点をもつ三編の物語を論じる。『善教房絵詞』については諸階層の民と僧侶の対話に、天台系の念仏行者の思考訓練の意図が見られること、『福富草紙』からは放屁芸を模倣しようとして失敗する福富の造形に、権威失墜を笑う下克上の精神が見出されること、『おようの尼』では古態を残す絵巻物系統の本文が発心譚の系譜に連なることを指摘している。

第二章は民衆的な宗教に関わる二編を扱う。はじめに『毘沙門の本地』の天界遍歴譚について、仏・菩薩の冥慮を悟らせるに足る、密教・修験道を核とする想像力を見出し、ついで『宝蔵絵詞』下巻では切目王子と阿古町の伝承の接点を解明して、いずれも作品の文学的形成の過程を跡付けている。

第三章は異類物に属する二編を対象とする。まず『精進魚類物語』では野菜・魚を擬人化する命名法を精密に注解しつつ、そこに卑俗な物を文芸化する、後の俳諧や狂言の先駆となる方法を見定める。御伽草子の代表作品『鼠の草子』（別名「鼠の権頭」）に関しては、新出本をも紹介しつつ、諸本を精読し周到に比較したうえで、娯楽的な怪婚譚から女子教訓的な物語へと変容する過程を析出している。

第四章は室町時代の女性の生き方への関心をうかがわせる四編を考察する。本妻の後妻への嫉妬を主題とする『磯崎』が、教訓性のあり方などに仮名草子に近い性格が認められること、『常盤の姥』が『源氏物語』などの古典の知識等とともに「孝」を考えさせる教訓書でもあること、『ささやき竹』が破戒僧の滑稽譚である略本系から貴族の恋愛物語である広本系へと巧みに改変されていること、『しぐれ』が『木幡の時雨』の影響を受け、当時の呪的信仰を摂取していることを指摘している。

本論文は、堅実な文献学的調査を基礎とし、諸書博搜しての注解によって作品の背後にある文化史的世界を解明し、なおかつそれらを生かして作品が文学的に形成される過程をも明らかにしている。扱われた作品は室町物語の一部にとどまるとはいえ、このジャンルの作品の特性の分析に新生面を開くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。